

2011(平成23)年度 第2回		開催月日		2011年5月23日(月)						
FD支援プログラム・指定PJ 定例MT議事録		場所・時間		13号館1階会議室・16時20分～18時00分						
出席者	△	小西由浩	○	藤波潔	○	平良直之	○	前堂志乃	○	友知政樹
	○	佐藤敬明	○	喜世川悠						
幹事：教学課 玻名城政弘、中山かつら										
議事	<b>【報告事項】</b>									
	<p>1. 本学におけるシラバス導入経緯、これまでの展開について 次のとおり、説明・解説があった。</p> <p>1) 本学におけるシラバス導入のきっかけ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大学設置基準の大綱化・簡素化</li> <li>・自己評価システムの努力義務化</li> </ul> <p>2) 本学におけるシラバス導入時期</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・導入時期：1993年度より導入（1992年度教務委員会にて審議承認）</li> <li>・期待した効果：講義の円滑で効率的な運営</li> </ul> <p>3) 導入から現在までの変遷</p> <p>1993年度から2011年度までの変遷過程について、次のとおり説明があった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・1992年度以前：学生便覧の中に掲載</li> <li>・1993～1994年度：講義計画書（講義概要、講義予定項目、受講心得、参考文献）発行 *講義概要：コマ毎に細かく記載する形式</li> <li>・1995～1996年度：履修ガイド発行 その中に講義要項としてシラバスを収録</li> <li>・1997～2000年度：履修ガイド、講義概要（シラバス）をそれぞれ発行 *履修ガイド：入学者へ配布、講義概要：全学年に配布 *当時のシラバスの課題：無駄が多い、前年度から詳しく記載する限界（1996年度第7回教務委員会） *コマ毎の計画記載から400～1000字の「概要・計画」の記載へ変更 *オンライン・シラバスを想定した改編（実際の導入は、2005年度）</li> <li>・2001～2004年度：コマ毎に細かく記載する形式の復活</li> <li>・2005年度：WEB公開開始 *記載方法が選択できるようになった</li> <li>・2006年度：講義概要冊子の廃止検討 *検討結果：4割近い学生が反対しており、時期尚早である結論を得た。</li> <li>・2011年度：講義内容MINI GUIDEの発行 *従来の講義概要の発行廃止。講義内容を簡潔にまとめた小冊子の発行 *講義詳細は、WEBで閲覧</li> </ul> <p>4) これまでの説明を踏まえて（意見聴取）</p> <p>上記1)～3)の説明後、意見交換を行った。詳細は、次のとおり。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本学のシラバス導入目的、きっかけが自己点検評価の努力義務化が背景にあること、学生の学習支援としての導入ではないのが印象的である。</li> <li>・導入目的、きっかけが内発的ではないことが、シラバス作成の目的が曖昧になっている一因ではないだろうか。そのため、シラバスのレイアウトや内容の変遷が頻繁に起こるのではないだろうか</li> </ul>									

- ・私立大学経常費補助金・特別補助の申請要件の影響も大きいのではないかと。そのことも本学のシラバスの変遷に影響を与えているのではないだろうか。
- ・一義的な目的が学生の学習支援ではなく、外部を意識したシラバス作成になっているのではないだろうか。
- ・2004年度の認証評価において、「シラバスについて学科毎に統一したフォームで書かれていても形式的なものが含まれており、実際に学生や大学外で関心を持つ者にとって具体的な授業内容を示すものとはなっていない場合が見受けられる」と指摘されたことも、シラバス作成の目的が外部を意識したものへ傾倒していった一因ではないだろうか。
- ・2006年度に議論された「講義概要（シラバス）の冊子廃止について」は、冊子の活用も大いにメリットが大きいことが意見として出されたことと記憶している。（冊子であれば、親子で、どんな授業、先生がいるのか把握できること、親が大学教育の内容を知ることができることなどから、上手く活用できれば、大学を知ってもらう機会になり得るのではないかと）

2. 本学のシラバス提出率、システムの概要について

次のとおり、説明・解説があった。なお、シラバス提出率は次表のとおり。

1) シラバス提出率

シラバス	2009(平成21)年度				2010(平成22)年度				2011(平成23)年度				
	掲載科目数	項目1	項目1	未記入率	掲載科目数	項目1	項目1	未記入率	掲載科目数	項目1	項目1	未記入率	
		【授業のわらわら】 記入科目数	【授業のわらわら】 未記入科目数			【授業のわらわら】 記入科目数	【授業のわらわら】 未記入科目数			【授業のわらわら】 記入科目数	【授業のわらわら】 未記入科目数		
共通科目	人間・文化科目	26	23	3	11.5%	26	23	3	11.5%	26	26	0	0.0%
	社会・生活科目	27	23	4	14.8%	31	28	3	9.7%	27	27	0	0.0%
	自然・健康科目	15	15	0	0.0%	17	17	0	0.0%	17	17	0	0.0%
	国際理解科目	19	17	2	10.5%	23	21	2	8.7%	22	21	1	4.5%
	情報科学科目	14	13	1	7.1%	12	11	1	8.3%	9	9	0	0.0%
	外国語科目	29	27	2	6.9%	27	26	1	3.7%	28	27	1	3.6%
	テーマ科目	8	8	0	0.0%	8	7	1	12.5%	8	8	0	0.0%
	英語・第二外国語	31	31	0	0.0%	28	26	2	7.1%	20	20	0	0.0%
	外国語科目・英語	72	57	15	20.8%	72	59	13	18.1%	68	63	5	7.4%
	外国語科目・その他	52	50	2	3.8%	52	52	0	0.0%	54	54	0	0.0%
法学部	法律学科	107	98	9	8.4%	92	89	3	3.3%	99	94	5	5.1%
	地域行政学科	106	101	5	4.7%	97	96	1	1.0%	101	100	1	1.0%
経済学部	経済学科	119	119	0	0.0%	116	116	0	0.0%	129	127	2	1.6%
	動物環境政策学科	117	111	6	5.1%	115	102	13	11.3%	120	109	11	9.2%
経営学部	企業システム学科	135	123	12	8.9%	133	127	6	4.5%	129	120	9	7.0%
	産業情報学科	119	102	17	14.3%	117	103	14	12.0%	131	120	11	8.4%
文学部	日本文学学科	142	120	22	15.5%	142	132	10	7.0%	130	128	2	1.5%
	文学言語文化学科	144	122	22	15.3%	144	109	35	24.3%	140	137	3	2.1%
	社会文化学科	121	102	19	15.7%	121	106	15	12.4%	119	115	4	3.4%
	人間福祉学科	166	121	45	27.1%	156	129	27	17.3%	155	146	9	5.8%
	合計	1,569	1,383	186	11.9%	1,529	1,379	150	9.8%	1,532	1,468	64	4.2%

2) これまでの説明を踏まえて（意見聴取）

- ・2011年度未記入科目数の大幅な減少の原因は、シラバス提出について、学務課からかなり頻繁に催促したため、大幅に改善された経緯がある。また、グリーン掲示板へ学科別の提出率などの掲載や、教授会での強い要請、認証評価の受審年度であることも要因として考えられる。また、一人の教員が提出しないと、数科目提出されないことになるので、それが率に反映されている学科が多いのではないかと。
- ・同一科目の場合、シラバスの内容の統一を検討しても良いのではないだろうか。
- ・シラバス提出率が100%にならない要因として、「任用が年度末になり、シラバス公表が間に合わない」、「新設科目の場合、作成が提出時期に間に合わない」などがある。
- ・システムがオンラインになったことで、シラバス提出の対応が迅速で効率的になった。

議 事

<p>議 事</p>	<p>・本学学生が他大学へ編入の際の単位認定で、シラバスが無いことで、単位認定に支障をきたす事例が多い。</p> <p>3. 「シラバス」に関する近年の政策動向について          次のとおり、説明・解説があった。主に強調された点を記す。</p> <p>1) 3つのポイント</p> <p>①「学士課程教育」の「質の向上」と結びついている。          ②学生に対する「学習支援ツール」の一つとして位置づけられるべきものである。          ③「シラバス」制度をどのように構築するかは、教育課程編成の体系化を前提とし、本学がどのような「学習支援システム」を構築するかに関わっている。</p> <p>2) 中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」におけるシラバス</p> <p>①教育課程の体系化</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・個々の科目についても、その目標や、内容・水準が判然としない。</li> <li>・教育課程の体系性に関しても、学問の知識の体系性だけでなく、当該大学の教育研究上の目的に即して、専攻分野の学習を通して、いかに学生が、学習成果を獲得できるかという観点に立つことが一層大切となる。</li> <li>・専攻分野の学習を通して、学生が学習成果を獲得できるかという観点に立って、教育課程の体系化を図る</li> </ul> <p>②単位の実質化</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・単位制度の実質化の必要性は、これまでも指摘され、改善策が提言されてきており、<u>シラバス</u>、セメスター制、キャップ制、GPA (Grade Point Average)などの諸手法が導入されてきた。</li> <li>・<u>シラバス</u>において「準備学習等についての具体的な指示」を盛り込んでいる大学は約半数にとどまっており、学生が必要な準備学習等を行ったり、教員がこれを前提とした授業を実施する環境にないことが懸念される。</li> <li>・卒業要件単位数、各科目の単位数配当、履修指導と学習支援の在り方などの点検・見直しを行い、諸手法（<u>シラバス</u>、セメスター制、キャップ制、GPAなど）を相互に連携させて運用する。</li> </ul> <p><b>【大学に期待される取組】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・卒業要件単位数、各科目の単位数配当、履修指導と学習支援の在り方などの点検・見直しを行い、諸手法（<u>シラバス</u>、セメスター制、キャップ制、GPAなど）を相互に連携させて運用する。</li> <li>・<u>シラバス</u>に関しては、国際的に通用するものとなるよう、以下の点に留意する。             <ul style="list-style-type: none"> <li>* 各科目の到達目標や学生の学修内容を明確に記述すること</li> <li>* 準備学習の内容を具体的に指示すること</li> <li>* 成績評価の方法・基準を明示すること</li> <li>* <u>シラバスの実態が、授業内容の概要を総覧する資料（コース・カタログ）と同等のものにとどまらないようにすること</u></li> </ul> </li> </ul> <p>3) 学校教育法施行規則の一部改正におけるシラバス          教育課程の体系性を明らかにする観点に留意すること。年間の授業計画については、<u>シラバス</u>や年間授業計画の概要を活用することが考えられること「学校教育法施行規則等の一部を改正する省令の施行について（通知）」（2010年6月16日、22文科高第236号）</p>
----------------	---

議 事	<p>4) 「第5期・中央教育審議会大学分科会の審議経過と更に検討すべき課題について(概要)」におけるシラバス(2011年1月19日)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「どの大学・学部を卒業したか」でなく「大学教育で何を修得したか」が問われるようになる。</li> <li>・体系性・一貫性ある教育課程の編成と、それに沿った教育の実施といった観点に着目</li> <li>・学位を与えるプログラム中心の考え方に再構成することで、公的な質保証と、大学の自主的・自律的な質保証を実現していくことも考えられる。</li> </ul> <p>5) これまでの説明を踏まえて(意見聴取)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・シラバスと授業評価アンケートの関連性を持たせることが必要ではないだろうか。</li> <li>・学生の「学びのサイクル」の構築、自主的に学んで行く上で必要な情報を身に付けさせる取組が求められるのではないだろうか。学習活動を通じて、「何がどれくらいできるようになったか」という意識がなければ、学生の「学びの体系化」は構築されないのではないだろうか。そのためには、「シラバスは学修の出発点」であるという位置づけが必要ではないだろうか。</li> <li>・学習効果を高めるためには、実態に応じて、シラバスの内容変更はあってしかるべきではないだろうか。また、今後はそういう概念を持つべきではないだろうか。</li> <li>・講義予定はこうだったが、実際の講義はこうだったという、振り返りの機会の設定が必要ではないだろうか。そうすれば、学生が学びや理解度を振り返ることができるのではないだろうか。</li> <li>・「提出・回収」のみで終わるのではなく、「利用度の向上」という視点がシラバスには求められるのではないかと。</li> <li>・共通教育改革の視点から、科目名をバラバラにするのではなく、目的は一緒だが、中身が異なることを把握するための情報がシラバスであるという視点も必要ではないだろうか。</li> <li>・科目を選ぶツールだけではなく、学ぶためのガイドとしての機能をシラバスは持つべきではないか。</li> <li>・履修登録をWEBでやることの弊害や課題もあるのではないだろうか。WEB登録により、科目情報に関する学生間の人的ネットワークが構築されなくなっていると感じている。友達同士で話し合っって登録科目を決定する場が減ってきているのではないだろうか。</li> <li>・WEB登録によって、学生にカリキュラムの体系性や学びの意識が低くなってしまい、無作為に登録してしまう弊害があるのではないだろうか。そのため、現在の学生にとって、シラバスの在り方が変容したのではなだろうか。</li> <li>・登録処理が便利になりすぎて、学生は大事な情報を見落としがちなのではないか。これまで活用されていた学びのツールが上手に活用されなくなっているのではないか。</li> <li>・シラバスで体系性を持たせるよりも、学部学科において、学士課程プログラムという考えを持ち、どういう順番でどういう科目を履修させるかということが、最も大事な前提ではないだろうか、そして、その前提をサポートするツールがシラバスであるべきではないだろうか。</li> <li>・カリキュラム構築は、「教育目標→カリキュラム→カリキュラムマップ→シラバス」という過程が理想であるが、現実として難しいので下から(シラバスから)変えていくという方向性になる。</li> <li>・カリキュラムの順次性やコア科目の設定を学科内で議論した方が良い。専門科目は順次性やコア科目設定の構築が難しいと感じているが、共通科目では順次性やコア科目の構築は実践しやすいのではないだろうか。共通科目の方が、柵が少ないので、カリキュラム・ツリーの中に順次性やコア科目設定などを行いやすいかもしれない。</li> <li>・学科内でコア科目設定の議論を行うと、近い人間関係のため、感情的対立や葛藤が起こりやすいと感じている。</li> <li>・一部の教員は、カリキュラムにおけるディシプリンを欲している。教える上で支障のあるためだが、現状のシステムでは、困難が多いと感じる。</li> </ul>
--------	--

議 事	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学生が学ぶ上で、シラバスの中に、「これは履修した方が良い」、「こういう知識をつける上で役に立つ」、「今後、この科目を履修する際に役立つ」という情報がシラバスに記載され始めたら、どの科目がコアなるかを気づくのではないだろうか。</li> <li>・ 専門科目でも順次性やコア科目の設定はやりやすいのではないだろうか。科目がコアではない分、授業内で教えたことを実践できるのではないだろうか。コアにならない科目によって、学科の特色、おもしろさが生まれてくるのではないだろうか。コア科目は、本学でなくても学べる内容のため、教員の個性が反映されにくい。コア科目にならない科目のメリットを大いに活用し、教える自由度が高く、チャレンジしやすいのではないか。よって、特色のあるコアにならない科目は、「カリキュラム・ツリー」の枝ではなく、ツリーに咲く花というイメージを持っている。 出口の関連性から考えた場合、コア科目と一緒にこの実と花を摘んだ方が良いよという履修指導が理想的ではないだろうか。</li> <li>・ 学部・学科によっては、コア科目の無い学科、それを作りにくい学科もある。複合的分野、学際色が強い分野は、コア科目が作りにくい。広く浅く、浅いけど広くというのが学科の特色になっていくと感じている。そのため、コア科目という幹の隣に、特色のある周辺科目という実や花を付けにくい。また、その場合、出口に結びつけた履修指導がやりにくいのが課題である。指導ではなく、学生への提案になりがちでアドバイスまで至らないケースが多い。</li> <li>・ 学科内での専門性が離れすぎると、何がコアで何が応用科目なのかがわかりにくい。</li> <li>・ コア科目があれば、学修システムの位置づけが明確になりやすいのではないか。</li> <li>・ 学修支援ツールとしてのシラバスという認識を持つべきだと感じる。</li> <li>・ 時間割編成において、教員側にコア科目はベテランで、特講は若手教員が持つという固定観念があるかもしれない。逆の考え方の方が良い場合が多いのではないだろうか。</li> <li>・ 学科の3つのポリシーがしっかりしていないので、ディシプリンが構築されにくい現状がある。</li> <li>・ シラバスや履修ガイドは、外部のためのもので、学生は見えていないと思っている教員は総じて多い。</li> <li>・ シラバスや履修ガイドを学生にどう活用させるか、どう学生の目に触れさせるかを突き詰めて考える時期にきている。</li> <li>・ 学科別の3つのポリシーの策定は、今後のカリキュラムの在り方にとって大事である。</li> </ul> <p><b>【連絡事項】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 2011年度第1回FD研修会（通算第4回） 日時：6月17日（金） 16：00～ 場所：13号館1階会議室 テーマ：シラバスの「在るべき姿」を考える 講師：安岡 高志 氏 「シラバスの「在るべき姿」について」（立命館大学教育開発推進機構教授）、青山 佳世 氏 「事例に基づくシラバス制度運営実態と問題点」（立命館大学 教育発支援課、教育開発推進機構事務局）</li> <li>2. 2011年度第2回FD研修会（通算第5回） 日時：6月24日（金） 15：30～ 場所：13号館301教室 テーマ：学科別「3つのポリシー」策定に向けて－「学士課程答申」との関連で－ 講師：川嶋 太津夫 氏 （神戸大学・大学教育推進機構/大学院国際協力研究科・教授）</li> <li>3. 6月のミーティング 日時：6月27日（月） 16：20～ 場所：本館3階会議室（B） 内容：他大学の事例検証 宿題：他大学の良い例、悪い例を持ち寄ること。</li> </ol>
--------	--